Ⅳ-239　歴史的地相系景観の読み方に関する研究

東京工業大学　学生会員　清水　祥雄
東京工業大学　正 会 員　中村　良夫
東京工業大学　正 会 員　斎藤　潮

1．研究の背景

大都市には居住という一つの機能を巡って少なくとも二つの要請がある。それは快適な住環境を守るという質的要請と、需要を満たすという量的要請である。これら二つの要請は都市の中で互いに抑制し合い、片方の一方的な受け入れを認めない。しかし東京に生まれ育った私は、質的要請の一つとしての景観的な地域特性が昨今の量的要請を前にして失われつつあると感じている。

本研究では代表景観という概念を提案することによって質的要請を支援する手掛かりを考える。つまり景観的な地域特性である代表景観の維持存続を考えることが、量的要請の一方的な受け入れを規制していくことにつながると考えるのである。従って、代表景観は歴史的・地形的（地相的）に地域を特徴付け、且つある程度人々に共通したイメージとして評価されているものでなくてはならない。

2．研究の目的

本研究では、代表景観が地形的・歴史的な背景をもつという考えを前提とし、それをパターンとして抽出することを主たる目的とする。そのための下位目的として、①文献・地図等の資料を用いて歴史的な景観を把握するための方法論を提示する。②方法論に基づいてケーススタディーを行い、特に震災前の景観をパターンとして抽出する。③抽出されたパターンを、集団表象として位置付けられる資料を通して評価する。更にその結果を手掛かりとして代表景観の抽出を行う。以上の三つを挙げる。

3．歴史的景観の読み方に関する方法論

1)文献を通じて対象地域の様子を浮き彫りにする

表1　文献の種類と活用

	何を伝えているか	どう活用するか
地　誌	客観的に事物の名称・大きさ・位置を伝える	地勢や構成要素を知る
図　会	事物を形態的に伝える	風景の要点や事物の形を知る
公的な記録	数値データや公式の出来事を伝える	構成要素の裏付けとして活用
民間の記録	民間人の生活を伝える	事物の背景を知る
紀行文	見聞に対する感動を伝えている	風景の要所や地域の特色を知る
小　説	風景に対する感受性・表現力を伝える	風景の面白さや要点を知る

2)旧版地図を用いて地形や構成要素を知る

第一段階（何があるのかを知る）
地形を知る・道や水の脈絡を知る・構成要素を知る

第二段階（何がどうあるのかを知る）
構成要素を立体的に張り付ける・構成要素をつなぐパターンを抽出する・パターンの代表となる典型を景観的に考える

第三段階（風景を読む）
パターンを結ぶ道を捜す・構成要素のたたずまいを考える

3)踏査により現存している事物を中心にその様子を知る

4)ヒアリング調査により当時の様子を知る

4．ケーススタディー地について

本研究のケーススタディー地域は現在の東京都世田谷区三軒茶屋・太子堂周辺であり、対象年代は明治後期から大正初期である。地形は、目黒川に注ぐ二本の川（烏山用水・蛇崩川）が形成した谷地と、街道を載せた台地が交互に東西を走っている。谷地と台地の比高は10m前後である。

5．景観構成要素の抽出

表２に地形を軸として景観の構成要素を抽出し、特色を把握する。（文献と旧版地図を主に利用）

表2　地形と構成要素の分布

	台　地	谷　地	斜　面
建物	民家（三宿44軒 太子堂65軒若林40軒） 商店（－－） 寺社（１０） 兵舎・病院（各１）	水車（５基）	－－
道	街道（主要２本） 盛土した道（稀）	谷地渡しの道（１３本） 根渡りの道（稀）	切土した道（７本） 盛土した道（稀）
水系	－－	用水（主要２本） 堤（－－） 橋（１４ヶ所）	水流（１ヶ所）

	台　地	谷　地	斜　面
樹木（高木）	屋敷林（－－） 寺社林（７ヶ所） 境木（３ヶ所） 並木（２３ヶ所） 孤樹（１８ヶ所） 木立（２３ヶ所）	境木（稀） 並木（稀）	境木（１３ヶ所・象徴的存在） 並木（１５ヶ所） 木立（広範囲）
樹木（低木）	畑作物（小麦・大麦が主） 樹地（広範囲・象徴的）	田圃（ほぼ全域） 畑（稀）	樹地（稀）
その他	垣（生け垣中心） 土囲（－－）	－－	－－

6．景観構成のパターン抽出から代表景観へ

景観構成のパターンを抽出し（図１）、以下に示す集団表象を手掛かりとして代表景観を抽出する。

1. 絵師の見る風景の要点を示す日本近代の図会　　2. 風景描写や景観体験を示す小説

3. 当時の人々の認識を示す、地域資料に基づく字名や事物の名称

1)景観構成のパターンと分布（図１）それぞれのパターンは対象地域から抽出された（全18中13を示す）

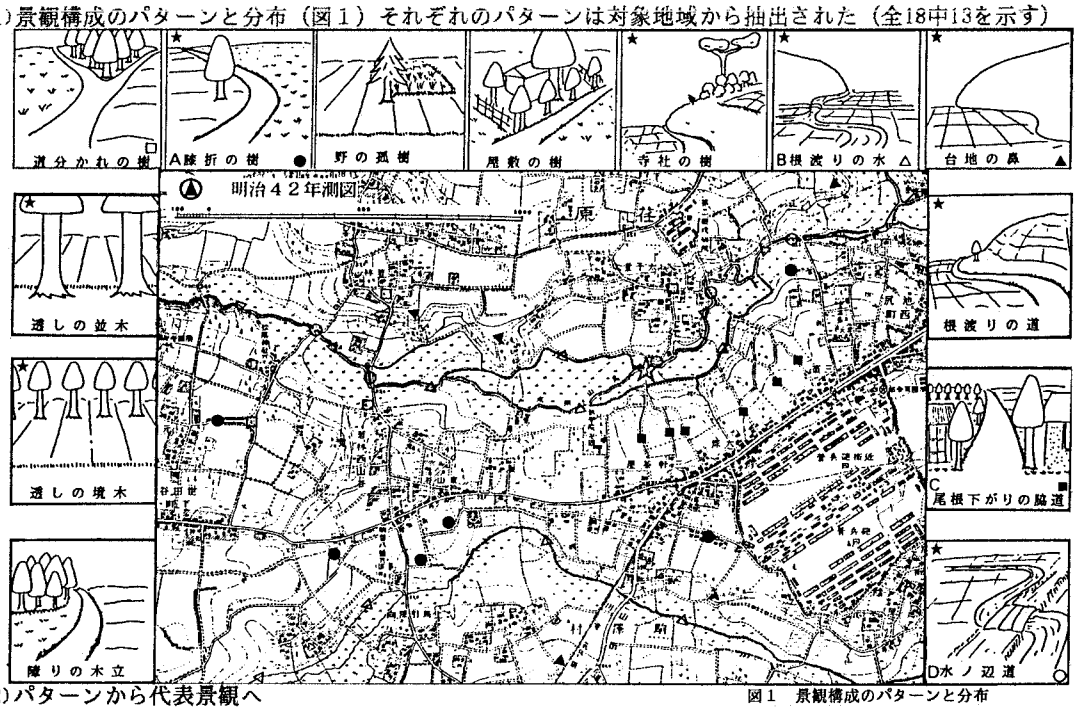

図１　景観構成のパターンと分布

2)パターンから代表景観へ

ここでは集団表象を手掛かりとして代表景観の抽出を行う。

A.膝折の樹　　膝折という言葉は文献『武蔵野』からの引用であり、ここでは膝を折ったような道の屈折部分に孤立して立っている樹を示す。立木が道の曲がり角を象徴しつつ、道全体を特徴付ける様な景観パターンが注目されていたことは徳富健次郎の小説『みみずのたはこと』の中の右に挙げる一文からも解る。従って、本研究では膝折の樹を代表景観として位置付ける。

> 一筋の里道が(中略)やがて二つに分岐して、直な方は人家の木立の間を村に隠れ、一つは人家の檜林に沿うて北に折れ(中略)雑木山の端からまた東に折れ、北に折れて、六七丁往って終に甲州街道に出る。此雑木山の曲がり角に、一本の檜があって、八幡杉の下からよく見える。
> 村居六年の間、彼は色々の場合に此杉の下に立って色々の人を送った。彼の田圃を渡り、彼の雑木山の一本檜から横に折れて影の消えるまで目送した人も少なくはなかった。(別れの杉)

B.尾根下りの脇道　　三宿から三軒茶屋にかけての大山街道から北に曲折れる６本の脇道を指す。全て台地の尾根から谷地に向かって下っている。はじめは街道上の屋敷林の間に見え隠れしているが、一歩入ると畑の中の緩斜面を木立や境木を見ながら下っていく道になる。この景観パターンは、代表景観として位置付けることはできなかったが、当時の三軒茶屋付近の脇道を代表する景観体験であることが指摘できよう。

C.水ノ辺道　　水路と道が平行している部分を指す。対象地域内の水路と道の接点においてはどちらかが屈折してしばらくの間平行して存在している。いわば親水空間であり、更に水路を渡る橋が近くに存在している。この景観パターンは以下に挙げる資料（図２他）によって注目されていたことが解る。従って、本研究では水ノ辺道を代表景観として位置付ける。

図２　武蔵名勝図会・部分

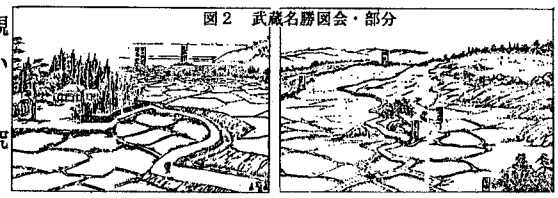

図１中☆印の橋を中心とする田圃の字名が橋場耕地と名付けられていた（森家文書土地譲渡証文より）

７．結論

本研究の結論を以下に示す。

1.資料を用いて歴史的な景観を把握するための手法を提示した

2.ケーススタディーを通じて１８個の景観パターンを抽出した

3.集団表象を手掛かりにして景観パターンの中から９個の代表景観（図１の★印）を抽出した